

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531245

研究課題名(和文) 臨床的アプローチとESDを基軸とした日韓相互理解のための歴史教育の教材開発研究

研究課題名(英文) Study and Development of Teaching Materials for History Education That Facilitate Mutual Understanding Between Japan and Korea: A Clinical Approach from the Perspective of ESD

研究代表者

釜田 聡 (KAMADA, SATOSHI)

上越教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：60345543

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、最初に日韓の学習指導要領と歴史教科書の分析・検討を通じ、日韓の相互理解をめざすESDを重視した歴史教育の内容と方法を探った。次に日韓の子どもの身の回りにあるESDに関するモニュメント等を調査し教材開発の可能性を探った。最後に研究成果に基づき授業を構想し授業実践・検証を行った。研究の結果、次の知見を得ることができた。日韓の中学校歴史教科書における日韓関係史に関する叙述をESDの視座から比較検討し、今後の歴史教育実践の充実に向けての指針を導出できた。教材開発・授業実践の結果、生徒が日韓関係史をESDの視点からとらえ直すことが、日韓相互理解のために有効であることが確認できた。

研究成果の概要(英文)：This study searched for contents and methods of history education that emphasize the perspective of ESD with an aim to facilitate mutual understanding between Japan and Korea. It investigated ESD-related monuments in the environment of children's daily life in Japan and Korea, seeking to utilize them in developing teaching materials. Based on the findings, class plans were developed, practiced and verified. Accordingly, the study obtained the following: 1 Through a comparative examination from the perspective of ESD on descriptions of the history of Japan-Korea relations in history textbooks in junior high schools in the two countries, a guideline was obtained for achieving enriched future practice of history education. 2 Through the development and utilization of teaching materials in class practices, it was ascertained that students' reviewing of the history of Japan-Korea relations from the perspective of ESD is effective in facilitating mutual understanding.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：国際理解教育 歴史教育 ESD

1. 研究開始当初の背景

(1)日韓の歴史教育上の諸課題

- 歴史認識問題を中心に -  
研究動向

教育の場で日韓の歴史認識問題が注目されたのは、1982年の歴史教科書問題からである。1982年日本発の歴史教科書問題は、日本と東アジア諸国との政治外交上の問題に発展し、東アジア諸国から痛烈な批判を浴びた。一方で、日韓相互の学术交流が本格化した。先駆的な先行研究としては、1987年10月、加藤章や二谷貞夫らが中心となって企画した海外学術研究「日本国と大韓民国の歴史教科書叙述に関する基礎的研究」が挙げられる。この研究は主に近現代史の教科書叙述を中心にした歴史学・歴史教育の視座からの研究であった。その後、日韓の歴史学・歴史教育研究者は、歴史教科書叙述を中心に真摯な対話を継続し、重厚な研究成果を積み重ねてきた。だが、従来の歴史学・歴史教育の対話は、専門化・細分化しているのに対し、日韓の教育現場で生起している歴史教育上の諸課題は複合的で、現代的教育課題を内包している。そのため、日韓の教室で同時発生している歴史教育上の教育課題に的確に答える日韓の研究成果は少ない。

そこで、釜田は平成18～19年度科研費基盤研究(C)「日韓の相互理解をめざした歴史教育の総合的基礎的研究」(研究代表者・釜田聡、370万円)と平成20～22年度科研費基盤研究(C)「臨床的協働研究による日韓相互理解をめざした歴史教育の基礎的研究」(研究代表者・釜田聡、350万円)を得て、新しい協働研究組織の構築と歴史教育の内容と方法の導出をめざした研究に取り組んできた。これまでのところ、日韓の児童・生徒に対して、アニメや世界遺産などの現代的な視座から過去の歴史的事象をつなげる教材開発を行うことで、日韓の児童・生徒ともに日韓双方の共通性に気づくことなどが確認され、臨床的アプローチとESDの可能性が認められた。

最近の日韓の歴史教育の動向

最近の日韓の歴史教育において、注目すべき動向が二つある。一つは、日本では、2007年学習指導要領が公表され、中学校社会科歴史的分野では、近現代の歴史の重視と日本の歴史の背景にある世界の歴史を重視する改善例が公表されたことである。もう一つは、韓国において2009年から新しい教育課程が実施され、中学生や高校生の必修科目である「国史」が「歴史」に変わり、世界史の流れの中で韓国史を理解できるようにしたことである。

これらの動向は、一国史中心で民族主義的な色彩が強かった韓国の歴史教育を見直す潮流の一環といえる。

このように日韓双方の歴史教育は、自国の歴史と東アジアの歴史、あるいは世界の歴史との関わりをこれまで以上に重視する方向

にある。言うまでもなく、日韓は古代から数々の歴史を刻み、1910年から1945年までは近現代史を共有している。当然、それぞれの時代をどのように描き、どうとらえるかは歴史学・歴史教育研究、歴史教育実践において大きな課題である。また、教科書叙述の在り方、授業の方法論、評価方法等、日韓両国で共通の課題は多い。両国の相互理解のためにも、歴史教育実践がより実りあるものにするためにも、これまでの日韓の協働研究を継続・発展させる必要がある。

(2)ESD

2002年12月の国連総会において、2005年から2014年までの10年間を「国連持続可能な発展のための教育の10年」とすることが決議された。これを受け、2008年に公表された「幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領の改訂案」は、ESDにかかわる文言が随所に盛り込まれ、教育の場で具現化することが求められた。ESDについては、環境教育や理科教育、社会科教育、国際理解教育の分野においては、実践研究及び理論研究がすでに行われつつある。しかし、新学習指導要領の趣旨に合致し、なおかつ日韓の相互理解を目ざした歴史教育の視座からカリキュラム・教材の開発に取り組んだ理論研究や実践研究は管見する限り少ない。一方、韓国においても、2009年から実施されている新教育課程において、ESDの萌芽が複数の教科等で確認され、今後の具体的な教育実践が期待されている状況である。

ESDは、国際理解や環境、世界遺産など、多様な視点があるが、何よりも「つながり」と「継続」を重視している。本研究プロジェクトでは、日韓の研究者及び教育実践者をつなぎ、その上で日韓の心の絆をつなごうとするものである。ESDの取組は、日本ユネスコ国内委員会が提起している枠組みのように、広い包括的な概念であり、これまで、専門領域のみ埋没した研究や教育活動をトータルな視野から統合した日韓相互理解のための歴史教育実践や研究が大いに期待されている。

(3)本研究の学術的な特色・独創的な点

本研究の学術的な特色・独創的な点は、従来の歴史学・歴史教育を中核とした日韓の歴史認識に関する学術的な研究成果を基盤として、臨床的アプローチから教育現場における日韓の歴史認識問題を紐解き、ESDを重視した新しい歴史教育の内容と方法に関する知見を導出し、教材開発と教育実践を通じて提示することである。

具体的には、次の2点が本研究の学術的な特色・独創的な点として指摘できる。

第1は、臨床的アプローチを中心に、日韓に横たわる歴史認識問題を紐解き、日韓相互理解のためのESDを重視した歴史教育の内容と方法に関する知見を導出することである。

本研究では、日韓の歴史学研究と歴史教育研究、日韓の歴史教育実践が行われている教

室を互いに結び付け、ESD を重視した新たな日韓の歴史学研究と歴史教育研究、歴史教育実践の関係をさらに深めることに本研究の特色・独創的な点がある。

第2は、研究組織と研究方法である。

本研究代表者の釜田聡は大学院学校教育研究科学校臨床コースに所属し、日々の教育研究活動において、理論と実践の往還に努めている。また学校教育実践研究センター教授も兼務し、大学近隣の小中学校教員と協働して実践的研究に取り組んでいる。日常的に大学の研究成果である理論知と教育現場で培われる実践知とを取り結ぶ実践的研究を進めている。本研究においても、こうした臨床的協働研究の手法を活用し、ESD を磁場とした日韓の協働研究を行うところに本研究の特色・独創的な点がある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本と大韓民国（以下、日韓）の教育現場に横たわる歴史認識問題に対して、日韓の研究者・教育実践者が協働で、臨床的アプローチと「持続可能な開発のための教育」（以下、ESD）を基軸として、日韓相互理解のための歴史教育の教材を開発することである。

具体的には、日韓の学習指導要領や教育課程、歴史教科書叙述、歴史教育実践をESDの視座から比較検討したり、児童・生徒や教師の意識調査を行ったりして、日韓相互理解のための歴史教育の教材開発のための視点を抽出した上で、実践を通じて教材を開発する。

## 3. 研究の方法

本研究の研究目的を達成するため、次のように研究を進める。

### 【研究方法】

日韓の学習指導要領と教育課程、歴史教科書の分析・検討、考察を通じ、日韓の相互理解をめざすESDを重視した歴史教育の内容と方法を探る。

### 【研究方法】

日韓の子どもたちの身の回りにあるESDに関するモニュメント等と子どもたちの歴史意識・歴史認識の関係を検討し教材開発の可能性を探る。

### 【研究方法】

とで導出された知見に基づき授業を構想し授業実践・検証を行う。

## 4. 研究成果

### (1)日韓の教育課程と教科書叙述

- 朝鮮通信使を中心に -

ESDの視点から中学校歴史教科書における朝鮮通信使に関する叙述の比較検討を試みた。

比較検討の結果、次の3点が確認できた。

1980年代、中学校社会科歴史的分野における朝鮮通信使についての叙述は質量共に徐々に充実してきた。

1990年代、朝鮮通信使という名称がすべての教科書で使われ、対馬藩や宗氏の役割についても加筆された。

2011年の見本本は、質量共に最も充実した叙述になりつつある。

一方で、次の2点が課題として浮き彫りになった。

ア 朝鮮王朝前期と朝鮮王朝後期の通信使の歴史的連続性を読み取ることは困難であった。

イ 江戸時代の朝鮮通信使と1875年の江華島事件までの歴史的経緯については教科書叙述だけでは十分に読み取ることは困難であった。

このような結果を踏まえ、ESDの視点を重視した朝鮮通信使の歴史教育実践を行う場合は次の三点を留意すべきと指摘した。

ア 秀吉の朝鮮侵略は朝鮮王朝と日本との関係を断ち切った。しかし、その後、日朝双方が英知を振り絞り国交の回復に結びつけていったのはどのような背景があったのかを丁寧に授業で考えさせることが必要である。

イ 江戸時代の朝鮮通信使を中核とした日朝交流は一見安定し華やかに見えるが、実際には様々な思惑や事件などを乗り越え、継続されたこと、そこにかかわった人々の思いを具体的に学ばせることが必要である。

ウ 江戸時代の通信使が、なぜ中断し、その後の江華島事件につながっていくのかを多面的・多角的に考えさせることが必要である。

ESDの視座から歴史教育実践をとらえると、生徒が現在と過去を統一的に把握したり、過去から未来や現在を考える知見をくみ取ったりすることができる学習活動の場が求められる。一方こうした教育課題は、歴史教育実践にとって古くて新しい教育課題ともいえる。

このような意味からも、上記のア～ウの視点を重視した朝鮮通信使の教材開発及び学習過程の工夫を行うこと、すなわちESDの視点からとらえ直した歴史教育実践の生成が急務である。

### (2)日韓の教科書制度と近世から近代の教科書叙述の検討

日韓の歴史教科書とも近世から近代までの日韓関係史の叙述は、朝鮮通信使関連の叙述だけであった。

日韓の歴史教科書とも朝鮮通信使の互惠性を十分に叙述していない。

日本の中学校歴史教科書の方が朝鮮通信使の叙述が充実している。

課題として、次の2点を指摘した。

韓国における教科書の採択状況と授業の質及び歴史認識に関する研究

韓国では教科書検定制度を採用し運用が始まった。教科書採択と実際の授業との関係を中心に、今後、日本と同様の問題点が噴出

することが予想される。一方では、そうした問題を共有することから、未来に向けての展望が開ける可能性もあると考える。

#### 朝鮮通信使と江華島事件の関係

本研究では、主に秀吉の朝鮮侵略（壬申倭乱）と江戸時代の朝鮮通信使について、日韓の中学校歴史教科書叙述の比較検討を試みた。しかし、朝鮮通信使の終焉と江華島事件の関係については十分に論究できていない。今後、江華島事件の教科書分析を行うと共に授業実践の方途についても検討する必要がある。

#### (3) フィールドワーク

現地調査等は、日韓のESDに関する歴史的建造物や博物館、史跡等を訪問し、教材開発のための資料収集を行った。具体的には、ソウル西大門刑務所、国立中央博物館、安東・河回伝統村、安東・屏山書院などを訪問調査した。日本では、対馬や鞆の浦、牛窓など主に朝鮮通信使の足跡を追った。

以下、韓国・安東と日本・鞆の浦の調査結果の一部について述べる。

#### 安東・河回伝統村

河回村の河回という名は、洛東江がS字型に村を囲むように流れていることに由来する。

河回村には、国宝2、宝物4、史跡1、重要民俗資料10、無形文化財1、天然記念物1、道指定文化財3など、韓国の伝統生活文化や古建築様式をそのままに残す多くの文化財が現在も良い状態で保存されており、村全体が世界文化遺産に登録されている。

世界文化遺産に登録されながらも、村には、現在も232名、125世帯（平成23年12月現在）が生活している。河回村では、朝鮮時代の人々の衣・食・住や信仰、年中行事などについて詳しく知ることができた。また、両班（朝鮮時代において、良民、両班、中人、常人と賤民、奴婢、白丁に分けられる身分階級の最上位に位置していた貴族階級に相当）の暮らしをうかがうことができた。豊臣秀吉の朝鮮出兵については歴史的分野の授業で取り上げる。また、江戸時代の朝鮮通信使についても同様である。しかし、朝鮮出兵以降、朝鮮通信使により国交が回復するに至るまでの日韓関係の歴史については具体的に取り上げることは少ない。また、朝鮮出兵が行われたころの朝鮮の人々の生活の様子や国の制度についてはほとんど取り上げない。そこで、朝鮮出兵から朝鮮通信使に至るまでの日韓関係の歴史についての授業を構想する上で、河回村の教材化は一つの切り口として有効であると感じた。

#### 広島県福山市鞆の浦

鞆の浦の調査目的は、次の2点である。

ア 江戸時代の朝鮮通信使の寄港地であること。

イ ESDの視点から優れた素材であること。

瀬戸内の歴史的な港町、鞆の浦の港を埋め立てて橋を架ける計画の賛否を巡り、30年近

くも住民の利便性と景観保護のあり方が問われてきた。2009年に景観保護を理由に埋め立て免許の交付を差し止める判決が出て新たな局面を迎えた。この鞆の浦の架橋問題を手掛かりとし、教材を開発することを目的とした。

広島地方裁判所は、「鞆の景観の価値は、私法上保護されるべき利益であるだけでなく、瀬戸内海における美的景観を構成するものとして、また、文化的、歴史的価値を有する景観として、いわば国民の財産ともいえるべき公益である」として、埋め立ての免許を差し止める判決を出した。景観保護を理由に公共工事を差し止める判決としては初めてであった。

広島県はこの判決に対して不服として控訴したが、同時に住民協議会が開かれ話し合いが進められ、いくつかの合意事項が作られてきた。住民の利便性と景観保護の二者択一でなく両立を図ったまちづくりが求められている。

このようなことを踏まえ、教材化の視点として以下の点が考えられる。

ア 生活の利便性と景観保護について様々な立場から考える。

イ 地区住民

ウ 地区外に住む人々

エ 景観権について判決文から考える。

オ 対立を乗り越え、合意を形成していくための方法

#### (4) 単元開発

単元名「わたしが考える日韓関係の歴史」  
単元のねらい

ア 日韓関係の歴史に興味・関心をもち、課題について意欲的に追究しようとする。

イ 様々な情報を基に日韓関係の歴史について考察し、自らの歴史認識を形成することができる。

ウ 様々な資料を収集し、そこから日韓関係の歴史に関する情報を適切に読み取ることができる。

エ 歴史認識の多様性に気付くとともに、歴史を学び歴史認識を形成することの意義や意味を見いだすことができる。

#### 単元観

中学校社会の歴史的分野では、生徒が自らの歴史認識を形成していく上で必要となる資質や能力を身に付けさせることが重要である。そのためには、単に教科書の重要語句を習得させるのではなく、生徒自身に歴史認識を形成することの意義や意味を実感させるような授業を展開しなければならない。また生徒には歴史的な事象間の因果関係に興味・関心、問題意識をもち、追究する経験を積ませることも大切である。

そこで、生徒が中学生の発達段階における自らの歴史認識を形成できるよう、次の三点に留意して授業実践を行ってきた。

ア 歴史的な事象に対する多様なとらえ方の存在を理解した上で事実認識すること

イ それぞれの事象のつながりから，原因や理由を推理すること

ウ 多様なものの見方や考え方を伴って価値判断をすること

本単元は歴史的分野の古代から近代までの学習のまとめとして位置付けた特設単元である。古代から近代までの日本列島と朝鮮半島とのかかわりを取り上げ，生徒がどのような歴史認識をもち，歴史認識を形成するに至ったかを確認する。また，調べ学習や意見交換の場を設定し歴史認識の多様性に気付かせるとともに，歴史を学び自らの歴史認識を形成することの意義や意味について考えさせたい。

学習指導要領中学校社会歴史的分野では，とりわけ東アジアの関係を重視しつつ，日本の歴史を中心とした通史を学ぶ構成になっている。教科書でも日韓関係にかかわる歴史的事象についての記述は少なくない。しかしながら，一つ一つの事象に対する多様なとらえ方の存在についてはほとんど言及されていない。また，それぞれの歴史的事象が時代区分ごとに記述されており，一連となっていない。そのため，それぞれの歴史的事象のつながり，日韓関係に与えた影響などについて，生徒は表面的もしくは偏った知識のみで自らの歴史認識を形成している可能性も否定できない。

そこで，本単元では，古代から近代までの日本列島と朝鮮半島とのかかわり，現在と過去，未来との関係について興味・関心，問題意識をもてるような教材開発と学習過程の工夫を行った。

単元の具体的な構成として，1次では，生徒が現代の日本と韓国の若者の歴史認識の違いについて知るためにVTR「NHKスペシャル日本のこれからともに語ろう日韓の未来」の視聴を位置付ける。2次では，教科書に記述されている日韓関係に関する歴史的事象を中心に，中世はじめから近代までの日韓関係の動向について理由を明確にして5段階で評価する学習を位置付ける。3次では，2次でまとめた日韓関係の動向について見直しを行うための調べ学習を位置付ける。4次では，3次で見直した日韓関係の動向について意見交換を行い，互いの歴史認識の共通点や相違点について確認する場を設定する。単元終了後に，事前・事後アンケートとワークシートをもとに生徒の変容を分析する。

日韓のよりよい関係を構築していく上で，歴史問題は解決していかなければならない課題の一つである。歴史認識の違いについて理解し，どのように合意形成するかが重要になっていく。また，過去の外交の歴史から，未来に向けてよりよい関係を構築していくための手掛かりを追究することも意義のあることである。本単元を通して，生徒が歴史認識の多様性に気づき，歴史を学び自らの歴史認識を形成していくことの意義や意味に

ついて見出すことを期待したい。

実施時期

平成23年12月5日から平成23年12月16日まで

対象生徒

J大学附属中学校2年B組41名

生徒の実態

2年B組男子20名，女子21名，計41名

歴史的分野については，近代までを履修済みである。歴史的分野の授業に対してほとんどの生徒が意欲的に取り組んでいる。2学期の授業アンケートでは，「歴史が好きだ」という質問に対し，46%の生徒が「大変そう思う」と回答した。「歴史が得意だ」という質問に対しては，32%の生徒が「大変そう思う」と回答している。

実践後のまとめ

古代から近代までの日本列島と朝鮮半島とのかかわりを振り返り，自らの学ぶ姿勢までも振り返ることを促した。つまり歴史的事象を多面的・多角的にとらえさせながら，自らの歴史認識そのものを省察の対象としたのである。このことは，「歴史を学ぶことが何の役に立つの」という問いに対しての応答にもつながるものである。

授業実践においては，生徒は自らの歴史認識の履歴を振り返り，他者の意見を参考にしながら磨き上げている姿勢が確認された。具体的な研究成果を研究目的に即してまとめる。

ア 生徒の歴史認識について

本授業において，生徒は教科書や資料集，ノートの記述，インターネットからの情報，専門書などを手がかりに歴史的事象にかかわる情報を収集し，仲間と歴史認識を磨き合う姿が随所に確認された。こうした生徒の姿は本実践研究が目指したものであり，本実践研究の成果といえる。また，事前事後のアンケート調査からは，生徒一人一人が自らの歴史認識に正対しようとする姿が確認された。まさに「歴史」と自分とのかかわりを見出そうとする生徒，自らの歴史認識と日韓相互理解のための歴史認識の在り方について考えようとする生徒の姿があった。こうした生徒の姿，すなわち日韓相互理解のための歴史認識はどうあるべきか考える生徒の姿こそが本実践研究の目標の一つであった。

イ 教師の授業プランについて

本単元は，古代から近代の日本列島と朝鮮半島の歴史を統一的に把握するための特設単元を構想した。授業の結果と考察から，随所にその成果が確認されたといえる。

今後の課題

ア 生徒の歴史認識について

生徒一人一人の歴史認識を丁寧に分け入ると，アカデミックな場で醸成された「学問の知」である歴史認識と，インターネットからあふれ出ている「雑多な知」である歴史認識とが混在していることが確認された。生徒にとっては，自分が入手した情報(歴史認識)

の中で、自分の心を揺さぶるものや興味・関心を引く歴史認識に自らを投影し、あたかも自分の歴史認識のように錯覚することがある。本授業実践においても、「多様な歴史認識」の美名のもと、学問に裏打ちされた歴史認識と雑多な歴史認識とが混在している生徒の歴史認識の現状が垣間見られた。

#### イ 教師の授業プランについて

中学校社会科歴史的分野における朝鮮通信使に関する教科書叙述は、1980年代以降、徐々に記述量が増え、慶賀使や朝貢使のような記述内容から対等な外交使節団であるという記述内容に変わってきた。しかし、秀吉の朝鮮侵略と朝鮮通信使の関係、朝鮮通信使と江華島事件の関係については十分な記述がなく、教師の力量に任されているところがある。本授業実践においては、授業者のねらいと生徒の朝鮮半島へのまなざしに一部かい離が見られた。このことは、本授業実践の課題としてだけでなく、一般的な歴史教育の課題としてとらえるべきであり、さらなる実践研究の積み上げと研究成果の共有が求められる。

歴史を学ぶ意義については、歴史的分野全体の学習を通じて感得させるべきものであり、継続的な教師と生徒との対話、生徒同士との対話、生徒自身が自分の歴史認識に問い掛ける場をふんだんに位置づけることが有効と考える。ESD とのかかわりについては、日韓共に「未来志向」を標榜しつつも、そのニュアンスは異なる。一般的に、日本側は「いつまでも過去にとらわれず、未来を見つめよう」という。一方、韓国側は「過去を鏡として、現在を考え、未来を展望しようとする」意味合いが強い。この微妙なニュアンスの違いが、時に日韓の政治外交上の問題に発展し、日韓関係に暗い影を落とす。根本的な解決のためには、日韓の歴史問題を政治外交上の問題として棚上げするのではなく、日韓相互の教室において、柔軟でしなやかな未来志向の歴史認識を磨き合う場を構築することが求められている。

#### 5. 主な発表論文等

##### 〔雑誌論文〕(計4件)

釜田聡, 許信恵, ESD の視点からの日韓中学校歴史教科書叙述の比較検討 - 江華島事件の歴史教科書叙述を中心に -, 上越教育大学研究紀要, 査読無し, VOL.33, 上越教育大学, 2014, 43-52

釜田聡, 許信恵, 日韓の中学校歴史教科書叙述に関する研究 - 近世から近代の日韓関係史を中心に -, 査読無し, 上越教育大学研究紀要 VOL.32, 上越教育大学, 2013, 93-102

釜田聡, 伊藤貴史, 坂田和也, ESD を基軸とした日韓相互理解を旨とした教材開発研究, 教育実践研究第22集, 査読無し, 上越教育大学学校教育実践研究センター, 2012, 35-44

釜田聡, ESD の視点からの中学校歴史教科書叙述の比較検討 - 朝鮮通信使の教科書叙述を中心に -, 査読無し, 上越教育大学研究紀要 VOL.31, 上越教育大学, 2012, 63-73

##### 〔学会発表〕(計1件)

釜田聡, グローバル時代の学校教育 - 韓国を中心に -, 日本学校教育学会研究大会, 2012.7.28, 武蔵大学

##### 〔図書〕(計1件)

釜田聡, 三恵社, 韓国の教育事情とグローバル時代の教育課題, 日本学校教育学会編集委員会, グローバル時代の学校教育, 2013, 296-307

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

釜田 聡 (KAMADA, Satoshi)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号: 60345543